

世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域 GIAHS Takachihogo-Shiibayama Site

○田崎 耕平¹

Kouhei Tasaki

1. はじめに

「世界農業遺産」(Globally Important Agricultural Heritage System, GIAHS)は、伝統的農業や農法、農村文化や農村景観の保全に資することを目的として国際連合食料農業機関(FAO)が2002年に創設した制度である。類似した遺産制度であるユネスコの「世界遺産」は、歴史的建造物などの不動産の保全を目的とするのに対して、世界農業遺産制度は地域のシステム(活動)の保全を目的としている。2020年3月現在において、全世界で59の農業システムが遺産に認定されている。高千穂郷・椎葉地域は、農林業の優れた調和が高く評価され、2015年に世界農業遺産に認定された。本報では、特に世界農業遺産を支えるかんがい用水路とその維持管理を行う土地改良区の役割について紹介する。

2. 高千穂郷・椎葉地域の農業システムの概要

高千穂郷・椎葉地域は標高1000~1700mの険しい山々に囲まれた山間地域である。平野部が乏しく食料生産上厳しい環境ではあるが、優れた森林管理と水・有機物資源の利用体系に基づく持続可能な農林業システムを構築し、長年にわたり地域の生活が営まれてきた。特に、森林管理においては、人工林としてスギ・ヒノキの針葉樹林、クヌギ等の落葉広葉樹林とともに天然林として常緑照葉樹林がパッチワーク状に広がる「モザイク林」という森林状態を維持し、資源利用と森林が有する水源涵養機能や生態系保全機能の両立が図られてきた。

さらに、高千穂郷・椎葉地域の農林業システムを特徴づけるのは、①焼畑農業、②棚田農業、③畜産農業(肉用牛の生産)である。焼畑農業では、0.5~1ha区画の森林を伐採して、下草を焼き払って耕地をつくり、ソバやダイズなどを4年程度栽培した後、再び20~30年かけて森林に戻すことを繰り返す。その後の森林回復を考慮して焼畑による耕地開発を小規模にとどめ、持続的・循環的に土地を利用することが特徴的である。一方、急峻な山間地において水稻栽培を実現するため、等高線に沿った山腹水路網と棚田の建設がなされた。地形的条件により水源を棚田から離れた山奥に求めざるを得なかったため、開削された山腹水路網は総延長が500km以上に及ぶ。また、築造された棚田の面積は1800haを超え、日本有数の棚田地域となっている。さらに、耕地面積の拡大が難しい本地域では、農業収入の大きな柱として、明治以降肉牛の生産が積極的に進められた。本地域の肉牛飼育は比較的小規模な形態をとることが特徴である。特に繁殖農家では、その約9割が飼育頭数9頭以下の小規模なものとなっている。そして、家畜飼料の一部は周辺の森林や草地および棚田に自生する植物によって賄われており、地域の生物資源を生かした飼育が行われている。

1 高千穂土地改良区 Takachiho Land Improvement District

Keywords: 棚田, 山腹水路

3. 世界農業遺産を支える土地改良区の取組み

1) **土地改良区の概要** 高千穂郷・椎葉地域には、高千穂町に 17 土地改良区、日之影町に 1 土地改良区、五ヶ瀬町に 1 土地改良区がある。地域の各土地改良区によって維持管理される用水路の総延長は 500 km 以上にもなる。高千穂土地改良区は、五ヶ瀬川の支流である岩戸川を水源とする山腹用水路を管理する。幹線用水路の総延長は約 36.5 km であり、受益の水田面積は約 92 ha である。

2) **地域の取組み** 中川登集落では、2011 年から地区内の水田(約 30 a)で赤米や黒米など 6 種類の稲で絵や文字をつくる「田んぼアート」に取り組んでいる。地元の子供たちや県内外の大学生を含めて集落総出で田植えや収穫祭を行うとともに、穂が色づき始める頃には集落を通る観光客の目も楽しませている。

また 2013 年には、「農事組合法人高千穂かわのぼり」が設立され、女性たちが中心となって地元食材の利用が進められている。そこでは、地元で収穫される米や大豆を利用した商品の開発を行い、みそ・きなこ・米麴等を地域内外にふるさとの味として販売している。

近年は、農地の貸し付けを通じた他地域とのつながる事例もみられる。宮崎市内の企業が約 40 a の水田を借りて田植えから稲刈りまでの作業を行っている。日頃の農地管理は集落で行っているが、水路の泥揚げ、草切り、防除作業などには集落と協働作業を行っている。

さらに、集落内に住む役場職員が主催して、町内の子供たちを対象に、用水路を利用した「ダグレース」を開催している。水路はかつて子供の遊び場であったが、今では逆に水路に近づかないように親から言われるようになった。こうした背景から、このイベントは水路に再び賑わいを取り戻すために始められた。

4. 今後の課題

組合員の高齢化と減少は大きな問題である。山腹を流れる 36 km の用水路の維持管理は非常に労力を要することである。スマート農業等の普及により、土砂浚い草切りの労働軽減が図られることが期待される。

また、土地持ち非農家の増加も懸念材料である。県外にいる土地所有者は土地改良区の役割に対する理解があるものの、代が変わると土地改良区そのものの存在も理解できないようになり、土地改良区の運営に支障が出る可能性がある。

さらに、ポンプや取水ゲートといった施設の老朽化によって更新費用は増加傾向にあり、土地改良区の財務状況の悪化が懸念される。また、近年の異常気象による災害の発生も憂慮すべき問題である。

一方で、世界農業遺産の認定を契機として、棚田を見に来る人は増加した。観光客の増加によって、美しい棚田風景の維持がこれまで以上に意識されるようになり、それを陰で支える用水路の維持管理の重要性も見直されている。